

日本ヒューマン・ケア心理学会 学術集会第23回大会

小泉隆平大会委員長(近畿大学)

2022年7月7日(木)～15日(金)Web開催

一般演題抄録

学校教員の職務多忙感・負担感尺度の作成 その1

-ファセットを追加した新版尺度の基礎統計量-

○今井田貴裕(人間環境大学心理学部)

磯和壮太郎(名古屋芸術大学教育学部)

キーワード：多忙感, 負担感, 学校教員, 尺度作成

【目的】

学校教員において、多忙感を職務の量の多さ、負担感を職務の質の重さと仮定した尺度が試作されている(磯和・今井田, 2021; 今井田・磯和, 2021)。同尺度は、項目をマッピングセンテンス(職務領域×感じ方)によって12項目を生成し、多忙感と負担感の項目を等価にしたうえで区別を試みた(Figure 1)。しかし、多忙感と負担感の相関が高すぎる($r = .82$)せいか、多忙感と負担感の因子に分類されなかった(今井田・磯和, 2021)。これはファセットが2つであったため、項目の散らばりの範囲が狭くなった結果と考えられる。

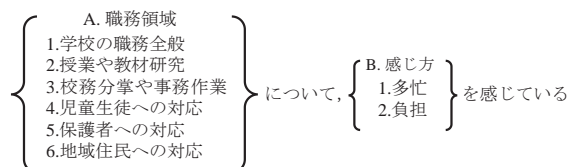


Figure 1 試作版の多忙感・負担感尺度のマッピングセンテンス

そこで本研究では、職務の性質のファセットを追加して学校教員の多忙感・負担感尺度を作成し、項目の基礎統計量を検討した。

【方法】

分析対象者 Web 調査サービスに登録している学校教員のうち、調査回答時に質問票内に設定された複数のダミー項目すべてに正確に回答した632名(平均年齢46.24歳($SD = 11.58$))を分析対象とした。

尺度作成 学校教員の職務多忙感・負担感尺度の作成方法として、マッピングセンテンス

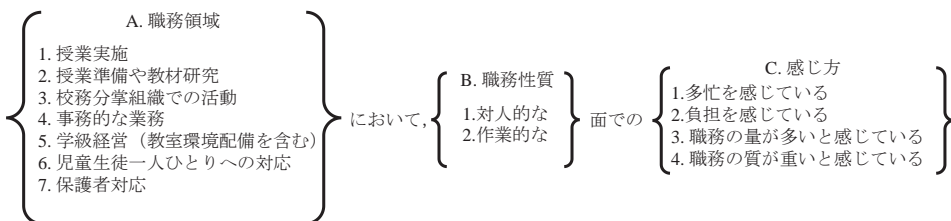


Figure 2 本研究の多忙感・負担感尺度のマッピングセンテンス

(Guttman, 1980)を用いた。7つの学校職務の領域×2つの職務の性質×4つの感じ方の3ファセットを設計し(Figure 2)、全ての組み合わせを56項目作成した(例:授業実施において、対人的な面での多忙を感じている)。

【倫理的配慮】

研究実施に際し、第二著者が所属する研究倫理審査委員会の承認を得た(第208号)。

【結果】

多忙感と負担感の各28項目に対して基礎統計量を分析した。その結果、天井効果と床効果が生じた項目は確認されなかった。また、全項目と各尺度のI-T相関分析の結果、全項目で0.1%水準の有意な正の相関を示した(多忙感: $r_s = .78 \sim .87$, 負担感: $r_s = .77 \sim .86$)。また、多忙感と負担感の相関分析の結果、0.1%水準の有意な正の相関を示した($r = .99$)。信頼性分析の結果、多忙感($\alpha = .98$)と負担感($\alpha = .98$)は高い値を示した。

【考察】

多忙感と負担感の全項目において、天井・床効果は生じず、I-T相関も良好な値であり、多忙感と負担感の信頼性係数も高かった。

しかし、多忙感と負担感の相関の値は1.00に近い値を示したため、相関を用いた探索的な因子分析では、これらの区別はできないかもしれない。ただし、マッピングセンテンスで作成された尺度に対して、確証的因子分析により妥当性を検証すること(戸ヶ里, 2009)や、多次元尺度構成法により項目間の距離を

可視化すること(真鍋, 2021)が有用とされている。

今後、こうした検証が必要である。

学校教員の職務多忙感・負担感尺度の作成 その2

-ファセットを考慮した確証的因子分析による検討-

○磯和壮太郎（名古屋芸術大学教育学部）

今井田貴裕（人間環境大学心理学部）

キーワード：多忙感，負担感，学校教員，尺度作成

【目的】

学校教員における多忙感を職務の量の多さ，負担感を職務の質の重さと仮定した試作版尺度の検討（磯和・今井田，2021；今井田・磯和，2021）を受けて，ファセットを追加した尺度の検討が進められている（今井田・磯和，2022）。同尺度の多忙感と負担感の相関係数は $r = .99$ ($p < .001$) と極めて高く，通常の因子分析では多忙感と負担感を弁別した検討ができない可能性が高い。また，学校教員の業務は学校種によってその負荷は異なっていると考えられる。

本研究では，戸ヶ里（2009）に倣い，ファセットを因子とした確証的因子分析によって，多忙感と負担感の再現性を検討し，多母集団同時分析によって学校種を超えて同じ因子負荷量のモデルが許容可能か検討した。

【方法】

分析対象者 本研究は，今井田・磯和（2022）の再分析である。なお，分析対象者 632 名（平均年齢 46.24 歳 ($SD = 11.58$)）の学校種は，小学校（259 名），中学校（158 名），高等学校（215 名）の教員であった。

分析尺度 学校教員の職務多忙感・負担感尺度（今井田・磯和，2022）を使用した。同尺度は，マッピングセンテンス（Guttman, 1980）を用い，7つの学校職務領域×2つの職務性質×4つの感じ方の3ファセットを設定した全56項目の尺度である。

【倫理的配慮】

研究実施に際し，第一著者が所属する研究倫理審査委員会の承認を得た（第208号）。

【結果】

全56項目に対して，ファセットごとに因子を仮定した確証的因子分析を試みた。この際，学校職務領域のファセットは7因子を想定し，その上に1つの高次因子を設定した。

また，職務の性質は対人面，作業面の2因子を，感じ方は多忙感と負担感の2因子をそれぞれ想定した。最後に，双因子分析のモデル構築法（清水・青木，2015）に倣い，職務領域・職務性質・感じ方のファセットに関する因子間の相関係数が0であるという制約を置き，ファセット内の因子の相関に制約は置かなかった。以上のモデルをロバスト補正を行った最尤法によって検討した結果，許容可能な適合度が得られた（CFI = .921, RMSEA = .057, SRMR = .035）。なお，抽出された職務領域の高次因子から各職務領域因子への因子負荷量は，.258 — .820 ($p < .05$ — .001) であった。また，職務の性質間の相関は $r = -.044$ ($p = .926$) であり，多忙感と負担感の相関は $r = .994$ ($p < .001$) であった。

続いて，同モデルに対して学校種をグループ変数とし，等値制約を因子負荷量のみ課した配置不変モデルを，ロバスト補正を行った最尤法による多母集団同時分析で検討した。その結果，適合度は良好ではなかった（CFI = .871, RMSEA = .081, SRMR = .088）。

【考察】

本研究では，全56項目に対して，ファセットを因子とした確証的因子分析を行った。その結果，全体では，許容可能な適合度が得られ，因子間の関係についても想定した仮説に応じた結果が得られた。しかしながら，因子負荷量を同一と仮定した多母集団同時分析では，良好な結果が得られなかった。このため，学校種によって負荷の高い職務の領域や職務の性質は異なると考えられた。また，ファセットの要素を統制して因子を抽出した場合でも，因子間相関は極めて高かった。

今後，ストレス尺度など他概念との基準関連妥当性の確認や，クラスタ分析，多次元尺度構成法を用いた検証が必要である。

緩和ケアに従事する看護師が終末期患者に寄り添うことを支援するプログラムの開発

-時間的展望理論を応用して-

○宇野あかり(日本学術振興会, 東北大学大学院教育学研究科)

安保英勇(東北大学大学院教育学研究科)

キーワード: 緩和ケア, 看護師, 時間的展望, 介入プログラム

【目的】 緩和ケアでは患者の死に直面することで、医療者の心理的負担が大きいことが指摘されており、医療者の理解・支援を目的としたアプローチが数多く行われている。発表者による先行研究(宇野, 2020, 2022; Uno, 2021)の結果より、これらのアプローチに新たに時間的展望の視点を取り入れることがより効果的であることが示唆された。時間的展望は個人の主観的な過去・現在・未来のとらえ方を指すものである。そこで、本研究では緩和ケアに従事する看護師を対象として、時間的展望理論を応用した終末期患者に寄り添うことを支援するプログラムの考案およびその効果検証を行うことを目的とする。

【方法】 参加者: 緩和ケア病棟に勤務、もしくは組織内で緩和ケア業務に従事する女性看護師12名で(平均35.5歳, SD=1.00)、介入群と統制群に6名ずつに振り分けた。実施時期: 2021年11月~12月に介入群にプログラムを実施し、その前後に両群に対して効果検証のためのアンケート調査を行った。プログラムの概要: 先行研究における時間的展望への介入実践を参考に、ワークシートや個別面接、グループワーク等、5つのセッションから構成されるプログラムを考案し、約1ヵ月にわたって実施した。

効果検証の質問項目: ①ターミナルケア態度の測定: FATCOD - Form B - J(中井 他, 2006), ②時間的展望の測定: 時間的展望体験尺度(白井, 1994), ③死生観の測定: 臨老式死生観尺度(平井 他, 2000), ④精神的健康の測定: GHQ-12(中川・大坊, 2013), ⑤プログラムの目標達成度のチェック: 各セッションの達成目標を踏まえて14項目の質問項目を作成, ⑥プログラムの感想: 自由記述式

【倫理的配慮】 本研究発表に際し、必要な

倫理的配慮は全て満たしている。なお、本研究は所属機関の倫理審査委員会の承認を得た上で実施している(受付番号 2021-006)。

【結果】 プログラムの目標達成度は、各項目の平均が5.17点から7.00点(得点範囲1-7点)と、いずれの項目についても高い得点が得られ、参加者が各セッションの目標を高い水準で達成できていたことが示された。

プログラムの効果測定のため、群(介入群, 統制群)を独立変数、各指標得点の事前・事後の変化率を従属変数としたU検定を行った。その結果、ターミナルケア態度の「死にゆく患者へのケアの前向きさ」($p < .01, r = .83$)と、総得点において介入群の方が統制群よりも有意に高かった($p < .05, r = .65$)。次に、時間的展望では、総得点における介入群が有意に高かった($p < .05, r = .67$)。死生観においては、「人生における目的意識」において、介入群の方が統制群よりも有意に高かった($p < .05, r = .65$)。精神的健康の測定に用いたGHQ-12の変化率においては2群間に有意差はみられなかった。

以上の結果から、ターミナルケア態度、時間的展望、死生観の一部について、介入群の得点が統制群に比べて統計的に有意なレベルで変化していることが明らかになり、本プログラムの一定の効果が示された。

【考察】 本研究で考案されたプログラムによって、参加者は時間的展望を肯定的に変化させるとともに、終末期患者への関わり方に対する意識に前向きな変化があり、プログラムの有効性が示された。今後は、実施規模や実施形態、効果検証の方法、参加者のリクルート方法などを再検討していくことで、プログラムの内容をより充実したものに改良していく必要があるだろう。

精神科看護師のアイデンティティ形成の様相

○重富勇（長崎県立大学看護栄養学部看護学科）

キーワード：精神科看護師，専門職，アイデンティティ，リフレクティ

【目的】

医療におけるケアが一般的なケアと異なり，対人援助技術であることをふまえ，双方向性でなければ不適切なケアとなる。ケアすることを通して果たす役割は，自己の存在の意味を知り，場の中にいる自己のアイデンティティを支え，相手の成長を援助することとして捉えている（Mayeroff1987）。そして，職業的アイデンティティが看護観を象徴するならば，個々の看護師が職業的アイデンティティを確立することは，看護の質を向上させる一つの方法である（グレッグ美鈴 2002）。

そこで本研究の目的は，精神科認定看護師または専門看護師が実践のなかで培ってきた自己を形成するアイデンティティを明らかにすることである。

【方法】

研究デザイン：半構成化面接によるインタビューを実施した。

対象者：精神科病院に勤務する精神科認定看護師または専門看護師 6 名とした。

分析方法：インタビューで得られたデータは逐語録として作成し，修正版グランデッドセオリーアプローチ（M-GTA）を用いて分析した。分析焦点者は精神科看護を実践している認定専門看護師であり，分析テーマは精神科看護師のアイデンティティ形成のプロセスとし，専門職としての実践知やアイデンティティを形成している語りを抽出し，臨床看護を通じた自己の成長とリフレクティブな様相をストーリーラインで形成する。

【倫理的配慮】

本研究は長崎県立大学一般研究倫理委員会の承認（承認番号 480）得て実施した。調査にあたり，自由意志であること，辞退による不利益が生じないこと，得られたデータは個人が特定できない ID 化し保管することを

口頭で説明し文書で同意を得た。本研究に際し必要な倫理的配慮を満たしている。

【結果および考察】

分析の結果，16 の概念が生成され，3 つのカテゴリーと 4 つのサブカテゴリーにまとめられた。ストーリーラインを説明する。

精神科看護師のアイデンティティ形成は，【走りながら考える】リフレクティブな看護実践のなかで，当初は＜看護の不透明さ＞や＜看護師としての危機感＞，＜現状へ相対する＞問題や違和感を覚えながら，[自分に気づく]振り返ることで＜現状を維持し発展させる＞ことにつながっていた。

看護師としての【自分の軸】は[看護に対する基本的態度]であり，＜看護への考え方の転換＞は＜行為の意味づけ＞によって＜患者との関係性に変化＞をもたらしていた。

自分のなかに看護はあるという【自分と看護の一体感】は，[専門職の役割意識]が働き＜看護を後輩に伝える＞ことで強化され＜精神科看護の魅力＞へとつながっていた。アイデンティティ形成そこには＜専門職の影響力とバランス＞が必要であった。

精神科看護師のアイデンティティ形成は直線的でなく行きつ戻りつ繰り返し，自分を＜組織のなかに位置づけ＞現状に適應するために＜自分に折り合いをつける＞ことでもあった。また，＜自分の価値を見いだす＞ことで＜看護師の誇り＞をもち続けていた。

精神科看護師や専門職としての岐路に立ち＜自分を模索する＞ことから＜自分を活かす＞主体性が[看護師としての成長]として捉えることができていた。

精神科看護師のアイデンティティの様相は，実践や経験に取り組みれ専門職の信念や価値を形成していた。普段あまり意識されるものではなく，基盤として存在していた。

大学生・大学院生への フラワーセラピーワークショップが自尊感情に与える影響 ーエゴグラムと情動知能の視点からー

○竹田 典（近畿大学心理臨床・教育相談センター）

キーワード：フラワーセラピー・エゴグラム・うつ・自尊感情・不安

【目的】

本研究における花や植物を介したコミュニケーションであるフラワーセラピー（以後FT）は、その活動を通して大学生・大学院生が、自己理解を深めるものである。そのプロセスの中で、参加者が、「今、ここ」の感情を花に表現し、花の形状とエゴグラムから自己の「思考・感情・行動」を理解するようになる。それによって、自尊感情が向上すること、自己や他者の感情を知覚することで、状況に則した対応ができるようになること、うつや不安を軽減させることが考えられる。

妊産婦の抑うつ傾向の予防的支援を目的としてFTを用いた竹田(2021)では、FT前後に、エゴグラムのNP・FCの上昇、ACの下降が有意にみられた。また、情動知能は、自己対応領域の下位因子である「感情察知」「自制心」「自己効力感」に上昇がみられ、「粘り」に有意な下降がみられた。「自己洞察」が有意に上昇した。

本研究では、妊産婦と同様の効果が、モトリウム世代である大学生・大学院生を対象にしたときにもみられるか、抑うつと不安の変化も併せて調査した。

【方法】

研究協力者：大学生・大学院生 27名

手順：①FTの研究の目的の説明と同意②FTの説明③プレテスト：自己成長エゴグラムSGE（桂・芦原・村上,1999）、情動知能尺度（内山・島井・宇津木・大竹,2001）、自尊感情尺度（Rosenberg, 1965）、自己評価式抑うつ性尺度 SDS（W.W.K.Zung, 1965）、STAI（Spielberger,C.D.1966）④お花の制作⑤作品を見て自分で良い思うこと・他者から良いと思うところを述べてもらう⑥制作時の「思考・

感情・行動」とエゴグラムの関連についての説明⑦ポストテスト：プレテストと同様の質問紙⑧振り返り

【倫理的配慮】近畿大学総合文化研究科倫理審査委員会から承認(2021年12月)を受けて実施した。

【結果】エゴグラムの4つの自我状態（高群・低群）によるFT前後のエゴグラムの値を比較した。CP,A,FCにおいては低群にNP値の低下がみられた。

自尊感情は有意に上昇した。EQSの自己対応領域の「感情察知」「粘り」「自己決定」などに変化がみられた。STAIでは、特性不安・状況不安ともに有意に低下した。SDSでも有意な低下がみられた。

【考察】各自我状態に、有意または有意傾向な変化がみられた。竹田(2021)が妊産婦を対象にした時にみられたFC値の上昇はみられなかった。一方、本研究ではNP値が低下した。FT前には軽度うつ状態を表していたが、FT後には改善がみられた。また、不安状態が低下したことは、自尊感情にも影響を与えたと考えられる。「ありのままの自分」を受け入れ、花を介した肯定的な自己評価・他者評価により不安が軽減されることが、抑うつ状態の改善につながったと考えられる。妊産婦を対象にした竹田(2021)と比較し、NP値の低下が見られたことは、FT前の値の高さによるものであり、FC値の上昇がみられなかったことは、FT前の値が高かったことによると考えられる。今後は、大学生・大学院生の研究協力者を増やすことやエゴグラムのパターンごとの特徴を見ること、また、インタビューによる調査を行うことなどが必要である。

別室登校指導に対する中学校教職員の意識

－ 質問紙による実態調査から －

○中川 靖彦（舞鶴市立大浦小学校）

キーワード：不登校，別室登校指導，負担感，校内支援体制

【目的】

全国の中学校における令和2年度中の不登校生徒数は132,777人であり，平成25年度より再増加が続いている（文部科学省,2021a）。また，不登校経験のある生徒のうち保健室や相談室等の校内の別室に登校していた期間がある者の割合は46.0%に上り（文部科学省,2021b），不登校支援において別室登校は重要な要因となっているといえるが，小泉ら（2015）は，教職員の負担感が別室登校指導を難しくしていると指摘する。本研究は，中学校教職員を対象とする質問紙調査を行い，別室登校指導に対する教職員の意識の実態を明らかにするとともに，教職員の負担感の少ない校内支援体制構築に向けた端緒を探ることを目的とする。

【方法】

- 質問紙：フェイス項目及び「別室登校指導に対する負担感」について6件法8項目からなる質問紙を構成し，各項目について「とてもある」を6，「ある」を5，「どちらかと言えばある」を4，「どちらかと言えばない」を3，「ない」を2，「まったくない」を1と得点化し，定量的に分析した。
- 調査対象と手続き：5府県の中学校（22校）の教職員に対し，Web入力による回答と提出を依頼した。
- 調査時期：2021年9月～10月

【倫理的配慮】

本研究発表に際し，舞鶴市教育委員会の事前・事後の倫理審査を経て承認されており，必要な倫理的配慮を満たしている。

【結果】

現在，何らかの立場で別室登校指導に関わっていると回答した教職員に対し，「別室登校指導への負担感」に関する質問8項目について因子分析（最尤法，Varimax回転）を行っ

たところ4因子が抽出され，第1因子から順に「不透明さへの不安」「専門職との連携」「校内での連携」「関係性の指導」と命名された（表1）。

表1 因子分析結果

因子	1	2	3	4
第1因子：不透明さへの不安（$\alpha=.958$）				
8.別室でどこまで指導すればよいかわからない負担	.934	.219	.219	.172
7.別室で何を指導すればよいかわからない負担	.828	.230	.269	.210
第2因子：専門職との連携（$\alpha=.890$）				
5.スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーとの連携の負担	.160	.853	.303	.271
6.専門機関との連携の負担	.315	.744	.306	.093
第3因子：校内での連携（$\alpha=.835$）				
2.別室登校児童生徒への学習準備に関する負担	.299	.330	.656	.177
3.教職員間の連携の負担	.289	.439	.535	.276
4.保護者との連携の負担	.228	.454	.524	.325
第4因子：関係性の指導				
1.別室登校児童生徒への対人関係やコミュニケーションに関する指導の負担	.345	.273	.328	.586

因子抽出法：最尤法 回転法：Kaiserの正規化を伴うバリマックス法

さらに，4因子について，教諭等に対して別室担当者群と非担当者群の間で平均値の差の検定を行ったところ，「関係性の指導」因子において有意な差が見られた（別室担当者群： $n=29, m=4.24, SD=1.431$ ，非担当者群： $n=88, m=3.53, SD=1.268$ ； $t(115) = 2.522, p = .013$ ）。

【考察】

分析の結果から，集団への適応等に課題を抱える別室登校生徒に対し，社会的自立への基盤となる対人関係やコミュニケーションに関する指導を進めることの難しさが別室登校指導担当の教職員の負担感を高くさせる要因となっている可能性が示唆された。このことから，別室登校指導においては，可能な限り担当以外の教職員も別室での指導に積極的にコミットすることを促したり，スクールカウンセラー等の専門性を効果的に活用したりする等，担当教職員のみが問題を抱え込むことのない対策を行い，「チーム学校」の視点に立った組織的な校内支援体制を構築することが重要であると考えられた。

※本研究は，科学研究費補助金（奨励研究：21H03953）の助成を受けたものである。

感謝が生じる要因の検討

○小野 真由子（東京都健康長寿医療センター研究所・桜美林大学大学院）

井藤 佳恵（東京都健康長寿医療センター研究所），池内 朋子（東京都健康長寿医療センター研究所）

藤野 秀美（東邦大学看護学部），長田 久雄（桜美林大学大学院）

キーワード：感謝 要因 類型化

【目的】「感謝」は、これまでウェルビーイングの向上や心身の健康を促進することが実証されている（Emmons & McCullough, 2003）。こうした感謝は主として人間関係の交流を通して生まれるとされているが、出来事、経験（Adler & Fagley, 2005）自然や神（Steindl-Rast, 2004）など人以外の何かによって引き起こされる場合もあるとも言われている。本研究はそのような感謝が生じる要因を国内外の文献から体系的に整理することを目的とする。

【方法】既存の尺度の質問項目から感謝の対象やきっかけなど感謝が生じる要因を抽出し次の手順で類型化した。アメリカ心理学会が運営する心理学系データベース（キーワード、gratitude）およびCiNii 国立情報学研究所 学術情報ナビゲータ（キーワード、感謝、心理）にハンドサーチを加え検索し、Gratitude Questioners-6（McCullough, et al. 2002）Gratitude, Resentment and Appreciation Test（Watkins et al. 2003）、Appreciation Scale（Adler et al. 2005）、Transpersonal Gratitude Scale（Hlava et al. 2014）、青年期用感謝尺度（岩崎他, 2014）、The Multi-component Gratitude Measure（Morgan et al. 2017）、母親に対する感謝の心理状態（池田, 2018）、Gratitude at work Scale（Cain et al. 2019）、Existential Gratitude Scale（Jans-Beke, et al. 2019）という9つの尺度を抽出した。これらの質問項目を精読し、感謝が生じる要因となる文脈にコードを振った。類似したコードを統合しサブカテゴリー、カテゴリーとして名前を付けた。

【倫理的配慮】本研究は、「研究課題：高齢者における感謝尺度開発に向けた情報収集のための調査」の一部として桜美林大学研究活動倫理委員会の承認を得ている。

【結果】36のコード、19のサブカテゴリーおよび6つのカテゴリーに集約された。

6つのカテゴリーは、生活を維持していくための基本的なものを意味する「生活するための基本的ニード」、これまでの人生経験で得た多くの恵みを意味する「恵まれた人生」、人生の中で起こったあらゆる喪失や逆境、障害となる出来事を意味する「困難や苦難の経験」、自分のために他者が行ってくれた様々なサポートを意味する「人のサポート」、自然や神仏/スピリチュアルな高次の存在などを超えた大きな何かを意味する「人を超えた何か」、当たり前のように感じていたことや、日常における小さなことを意味する「ささやかなこと」であった（表1）。

表1 感謝が生じる要因のカテゴリー表

カテゴリー	サブカテゴリー
生活するための基本的ニード	健康
	衣食住
	経済状態
恵まれた人生	安全
	成功
	チャンス
	環境
	生命
困難や苦難の経験	共に過ごす時間
	喪失
	逆境
人のサポート	世話
	気づかい
	承認
人を超えた何か	応援
	神の存在
ささやかなこと	自然
	特別ではないこと
	季節が移り替わること

【考察】感謝が生じる要因は人間関係およびそれ以外の何か、さらに肯定的な側面のみならず否定的な側面も含めて整理できることがわかった。唯一否定的な側面として抽出された困難や苦難の経験は、苦しい状況であってもその中にも価値を見出すという（Adler & Fagley, 2005）、自己成長に関連する要因であることが示唆される。

大学1年生のキャリア教育による職業意識向上プロセス

-TEA分析を用いた学生のキャリア形成過程の事例-

○原瑞穂(香川大学キャリア支援センター)

キーワード：大学生、職業意識、TEA、キャリア形成

大学生は明確なキャリアの目標を持って入学する者は少ないと言われるが、学生の職業意識向上は、その後の大学生活に影響を及ぼす点で重要な課題であり、キャリア教育はその力の育成に重要な役割を担っている。

【目的】本研究では、キャリア科目の学びが職業意識向上に影響を与えると仮定し、そのプロセスを明らかにすることで、キャリア教育の可能性を探ることができると考え、キャリア科目受講を介して職業意識の変容とプロセスを可視化すること、その結果から、学生のキャリア形成に有効な教育プログラムの示唆を得ることの2つの目的を設定した。

【方法】2021年度後期にキャリア科目Aを受講した学生A(年齢20歳)を対象として、半構造化面接を行った。これは、研究協力者の自由な語りを尊重するためであった。本人の同意を得て、40分程度のインタビューをICレコーダーに録音し逐語録を起し、研究データとした。分析方法は、TEA(安田・滑田・福田・サトウ、2015)を援用した。

【倫理的配慮】インタビューにあたり、研究の

目的と個人情報の取扱い、回答への自由、途中中断の自由、データの責任破棄について説明し同意を得た。

【結果と考察】本研究の分析結果をAの経路選択をキャリア理論を交えて説明する。

第1期：「キャリアイメージの探索期」自己分析が進むにつれて、イメージを具体的な言葉で説明できる状態が確認できた。

第2期：「キャリアイメージの拡張期」様々な大人の話聞くことによって、視野とキャリアの可能性を確認する様子が確認できた。

第3期：「キャリアイメージの再生期」イベントや様々な課題への取組を通して自信が持て、将来の目標が明確になったてきた。

第4期：「キャリアイメージの創成期」企画の評価を通して自身の可能性に気づく。それを試すために新しいチャレンジを始めた。

以上の結果から、Aは授業での学びによって自己効力感が向上し、漠然としたキャリアイメージが明確になるプロセスが確認できた。この結果から、本プログラムが職業意識向上に有効であることが示された(図1)。

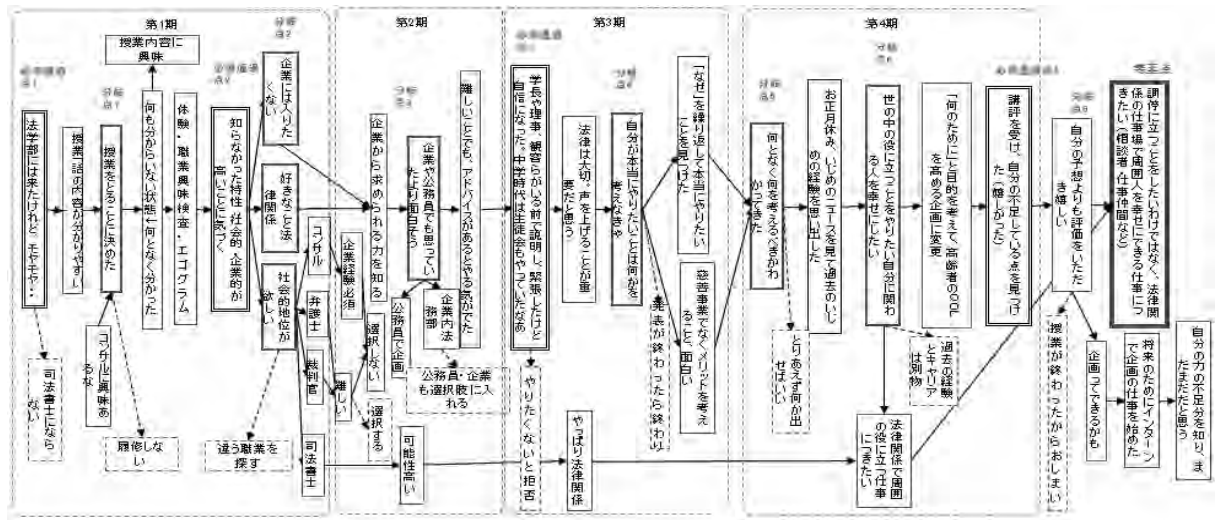


図1 学生のキャリア科目受講による職業意識変容プロセス

大学生の愛着が学校適応に及ぼす影響の緩衝要因の検討

-資源維持理論における資源管理能力に着目して-

○藤井 彩加(近畿大学総合社会学部)

塩崎 麻里子(近畿大学総合社会学部)

キーワード：学校適応，愛着，資源維持理論，資源管理能力

【目的】

大学進学率が年々上昇している反面，不適応によって中途退学してしまう人も少なくない。本研究では，大学生の資源を探したり，調整したりする能動性である「資源管理能力」に着目し，愛着不安及び愛着回避の特性により適応における重要な資源である人間関係を築くことが苦手でも，資源管理能力が高ければ大学生生活への適応感が高まるかを検討することを目的とした。

【方法】

対象者 大学生 167 名(男性 43 名，女性 123 名，その他 1)を分析対象とした。

調査内容 調査は質問紙法で行われた。フェイスシートでは性別と，資源の入手しやすさを測るため家族以外の人に会う日数(1週)の回答を求めた。

尺度は以下の 4 つを用いた。①学校への適応感尺度(大久保・青柳，2005)：下位尺度に「居心地の良さの感覚」，「被信頼・受容感」，「課題・目的の存在」，「拒絶感の無さ」があり，計 29 項目を 5 件法により回答を求めた。

②親への愛着尺度(丹羽，2005)：下位尺度は「愛着不安」，「愛着回避」の 2 つがあり，計 17 項目を 5 件法で調査した。③所持資源尺度：Hall et al., (2006)を参考に作成。「物質的資源」，「状態的資源」，「個人内資源」，「エネルギー資源」の 4 つの下位尺度，計 18 項目を 5 件法により回答を求めた。④大学生用資源管理能力尺度：孫(2011)を参考に作成し，計 20 項目を 4 件法で回答を求めた。

【倫理的配慮】

本研究発表に際し，必要な倫理的配慮を満たしている。(倫理審査承認番号 3-6)

【結果】

資源の入手しやすさ 一週間のうち，家族以外の人と会う日数を資源の入手しやすさの

指標とし，回答を求めた結果，平均 3.46 日は家族以外の人と会っていることがわかった。また，所持資源尺度を用いて，大学の環境が居心地良く，充実したものになるために助けとなる資源について調査した結果，特に，自己肯定感や自身の経験といった内的資源が助けになっていることが分かった。外的資源の中では，友人と家族，お金と衣服が助けになっていると回答した割合が多く，特に友人の存在が大きいことが分かった。

階層的重回帰分析 結果から，愛着不安と資源管理能力の交互作用が有意傾向であり，愛着不安高群において資源管理能力低群が，資源管理能力高群よりも適応感が低い傾向があることが示された。また，愛着不安と資源管理能力が適応感に対して影響を持つことが明らかになったが，所持資源，愛着回避は影響を及ぼしていなかった。

Table 1 階層的重回帰分析の結果

変数名	Step1	Step2	Step3
愛着回避	-0.082	-0.047	-0.051
愛着不安	-0.157 **	-0.155 **	-0.155 **
所持資源	0.200 *	0.024	0.039
資源管理能力		0.529 **	0.525 **
愛着回避*資源管理能力			-0.047
愛着不安*資源管理能力			0.215 +
所持資源*資源管理能力			0.012
R^2	.127 **	.287 **	.304 **
ΔR^2	.127 **	.161 **	.017

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

【考察】

本研究によって，愛着不安が高いことによる適応感低下のリスクを，資源管理能力が緩衝し，低減させるというメカニズムが示されたといえる。また，所持している資源の量よりも，今後どれほど増やして活用できるかという管理能力が適応感により大きく影響することを示せたことは意義が大きい。今後は，愛着不安が高い人に対象を絞り，より詳細に効果的な資源の種類を検討する必要がある。

心理職を希望する大学生がイメージしている専門性とは何か

-福祉領域に対するイメージ-

○小正 浩徳（龍谷大学 文学部）

三宅 右久（金沢市こども相談センター）

キーワード：大学生 心理職養成 福祉領域

【目的】

公認心理師や臨床心理士の職域の一つとして、福祉領域がある。この領域では多様な領域の専門職が携わっていることから他職種の立場を理解し、チームの一員としての活動を求められる等、特有の専門性が必要になると考える。一方で、将来心理職として働くことを希望する大学生はどのようなことを必要と考えているのだろうか。

そこで本研究では、学生たちの福祉領域に対する素朴なイメージを明らかにすることで、学部生への心理職養成に向けた教育の在り方を検討することを目的とする。

【方法】

調査参加者：心理系大学3年生 6名
調査実施日：X年1月（心理系の講義内で実施）

方法：1名あたり付箋紙（7.5 cm×2.5cm）を5枚配布した。そして、「福祉領域における心理職の専門性とは？」と教示し、この教示により連想される言葉や文章等を1イメージにつき、付箋紙1枚に記載させた。その後、6名にイメージが記載された付箋紙を、表記に関わらず同じ意味内容と考えられるものについて話し合いを通して集め、グループ化させた。グループ化された付箋紙を俯瞰し、グループごとにタイトルを付けさせた。

【倫理的配慮】

本調査実施にあたり、学生達には参加の有無に関わらず成績評価には一切関係しないことや途中での退席等可能なこと、研究目的や匿名化して発表を行うこと等説明した。そして、同意を得られた学生が調査に参加した。

また、この発表に関連し開示すべき利益相反関係にある企業等はない。

【結果】

合計 30 枚の付箋紙が作成され、話し合いを通してグループ化した結果、6つの大グループができた。なお、そのうちの1グループには3つの小グループが内包されている。

以下に大学生が考えた大グループ名ならびに小グループ名を記載する。

① 『一般知識』、② 『関係者支援』、③ 『本人への心理支援』、④ 『社会制度』、⑤ 『社会的背景』、⑥ 『専門的知識：6-1 学術的知識、6-2 職能職責、6-3 多職種連携』

【考察】

今回調査に参加した大学生たちが素朴にイメージした福祉領域の専門性は6つあることが明らかとなった。その内容を確認すると、知識にまつわるものがほとんどであった。

一方で、他者に関わる際に考慮したい内容（たとえば相手への配慮やコミュニケーションのあり方等）はみられなかった。

福祉領域の現場における心理職には、心理支援だけではなく、他職種との連携においてマネジメントを遂行することが求められる。また社会的資源を活用した援助も必要であることから、地域における社会的資源やその根拠となる法制度等の把握も必要であると考ええる。

これらから、大学生の福祉領域における専門性のイメージは講義等での知識によって構成されていると考えられる。そして当然ではあるが、そこには臨床現場としての感覚にもとづく内容は少ない。そこで、学部教育においても、知識と実践の融合がなされるような講義を展開し、心理職として働くために必要となることは何かを学生がさらに考えを深められるような工夫が必要であろう。

障害のある子をもつ母親の障害受容

-グリット、情動知能、フォーカシング的態度、幸福感との関連-

○風波見結子(近畿大学大学院総合文化研究科)

小泉隆平(近畿大学)

キーワード：障害受容、グリット、情動知能、フォーカシング的態度、幸福感

【目的】

本研究では、障害のある子をもつ母親の障害受容に影響を及ぼす心理的要因を明らかにすることを目的とした。研究1ではインタビュー調査を通して母親の障害受容に影響を与えていると考えられる心理的要因を探り、研究2では質問紙を用いてそれらの要因との関連を検討した。

【方法】

<研究1>

調査対象者：障害のある子をもつ母親5名。
調査手続き：PAC分析を用いてインタビューを行った。連想刺激文は「あなたは子どもの障害をどのような思いや気持ちで受け入れてきたと思いますか。」とした。

<研究2>

調査対象者：障害のある子をもつ母親28名。母親の平均年齢は61歳で(SD=7.16)、子の平均年齢は31.1歳であった(SD=7.98)。調査手続き：研究の趣旨を説明文書で説明し、同意を得られた者を対象に質問紙への回答を求めた。対象者へアンケート用紙を郵送し、回答後のアンケート用紙は同封した返信用封筒を用いて回収を行った。

質問紙構成：日本語版グリット尺度(竹橋他, 2019)、EQS(内山他, 2001)の「粘り」、「熱意」、「目標追及」、「配慮」、「自発的援助」、幸福感尺度(福田, 2018)、FMS-18(森川・永野・福盛・平井, 2014)の「距離」、障害児・者を持つ母親の障害受容尺度(倉重・川間, 1995)を使用した。

【倫理的配慮】

本研究は、近畿大学総合社会学部研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【結果】

<研究1>

PAC分析の結果から、対象者らは子のため

に何とかしてあげたいと思い育ててきており、グリットが高く、情動知能の下位因子が当てはまるのではないかと考えた。さらに、子の存在から幸福を感じており、フォーカシング的態度の「問題との距離を取る態度」をうまく扱うことができていると考えた。

<研究2>

障害受容尺度6因子と各尺度の相関分析の結果、対社会積極的態度は集団主義的やりがい幸福感と有意な正の相関が($r(26)=.429, p<.05$)、個人主義的やりがい幸福感とは正の有意傾向が見られた($r(26)=.340, p<.10$)。障害観は目標追及と有意な負の相関が($r(26)=-.378, p<.05$)、集団主義的やりがい幸福感とは正の有意傾向が見られた($r(26)=.342, p<.10$)。保護的養育態度は自発的援助と有意な負の相関が($r(26)=-.379, p<.05$)、距離とは正の有意傾向が見られた($r(26)=.320, p<.10$)。

【考察】

目標追及力がある人は、子の障害について正しい認識ができ、障害のある子に援助を与えようとする人ほど、子への養育態度が保護的でない傾向にあると考えられた。また、子に障害があるという問題に対し、距離を取って心の余裕を保つことができると、子の障害を現実的に受け止め、より子に対して保護的な養育態度をとると考えた。子に関わるやりがい、社会への積極的な態度としてあらわれていた。研究1で「子どものために何とかしてあげたいと思い、一生懸命育ててきた」と語った対象者らの回答から、グリットと情動知能の下位因子を尺度として当てはめたものの、関連があったのは情動知能の目標追及と自発的援助のみのため、対象者らのニュアンスと合う適切な尺度構成ではなかったと考えられた。

認知症の高齢者に対するタッピングタッチの効果 その1

—認知症の行動・心理症状に着目して—

○今井田真実(中京学院大学看護学部)

今井田貴裕(人間環境大学心理学部)

キーワード：タッピングタッチ, 認知症, BPSD, 看護師

【目的】

タッピングタッチ (Tapping Touch: TT) は、指先で左右交互に軽くタッチするケアの技法である(中川, 2004)。TTは、看護や介護などの専門分野で活用されており(e.g., 白鳥他, 2017)、看護師は、患者の心理的な安定に対してTTを活用している(e.g., 益山他, 2018)。

ところで、認知症の症状には、脳機能の低下を起因とする記憶障害などの中核症状と、中核症状を起因とする抑うつ、幻覚、睡眠障害などの認知症の行動・心理症状(Behavioral and Psychological Symptom of Dementia: BPSD)がある。看護師は、BPSDへの対応に困難を感じることがあり(e.g., 川村他, 2020)、やむを得ず薬物による鎮静を選択することもある。しかし、薬物は認知症の高齢者にとって負担の大きい介入であるため、代替手段が必要とされる。TTは、短時間の介入で心身や対人関係上の効果があり、専門的知識も必要ない(中川, 2004)ため、BPSDに対する非薬物的介入として有望である。しかし、認知症の高齢者にTTを適用した事例報告は少ない(e.g., 平良他, 2012)。

本研究では、認知症の高齢者に対して複数回のTTを実施し、認知症の症状に対する変化を検討した。

【方法】

協力者：80歳代の女性で、短期記憶障害とBPSD(幻視、抑うつ、早朝覚醒や中途覚醒などの睡眠障害)があった。

来談経路：第二著者の前所属機関で、来談者の娘が心理療法を受けていた。親子で来談した際に、第二著者がTTを紹介したところ協力者から希望があったため、第一著者がTTを10分程度実施した。TTは3日お

きに計3回実施した。なお、本研究は、TTの実施前後に質問票調査を行った。

【倫理的配慮】

本研究は、協力者とその家族から公表について紙面と口頭で同意を得た。また、本研究は、公表にあたって必要な倫理的配慮を満たしている。

【結果】

#1のTT実施前では、協力者の表情は硬く、自発的な発言もほとんどなかった。また、質問票の回答は集中力が続かず投げやりであった。TT実施後では、タッチについて、「もっと強いほうがいい」と述べた。質問票の回答時、質問内容を聞き返し、自身が抱える身体症状を伝えようとした。また、笑顔で「散歩に行きたい」など自発的な発言があった。#1以降、幻視は消失した。

#2では、#1のTT実施後の表情や疎通性が維持されたが、早朝覚醒や中途覚醒は続いていた。#3でも、娘より幻視が確認されなかったことが報告されたため、終結に至った。1ヶ月後の面談では、娘より幻視が消失したままで、自発的な行動が増加したと報告された。

【考察】

認知症の高齢者に対してTTを実施した結果、BPSDの一部の症状は消失した。

BPSDは、周囲の人々からの否定的な関わりや、それに伴う自尊心の低下によって増悪する。したがって、本事例の協力者の肯定的な変化は、TTによる大切にされた感覚や肯定的感覚の増加などの心理的効果、安心感や信頼感などの対人関係上の効果が寄与した可能性がある。

以上から、TTは認知症の高齢者に対する非薬物介入の選択肢の一つとなるかもしれない。

乳がん経験の有無と SOC の関連についての検討

○雲財 啓(神戸大学附属中等教育学校)

キーワード：乳がん経験者、乳がん経験配偶者、Sense of Coherence

【目的】

乳がんの罹患や治療を経験することは、その後の人生の見通しに大きな影響を与えると考えられる。例えば、女性(罹患や治療を直接的に経験、以下経験者)、男性(乳がんを罹患した女性を支えることで間接的に経験、以下経験配偶者)それぞれにおいて、時間的展望の類型が乳がん経験の有無で異なることが示されている(雲財, 印刷中)。本研究では、他に影響を受ける変数として、Sense of Coherence(以下 SOC)を取り上げて検討を行う。

【方法】

2020年7月にインターネット調査会社に委託した。経験者、経験配偶者については、乳がんに関して「自分自身(もしくは配偶者)が、第一子出産以降に初発乳がんの罹患、もしくは治療経験がある」と基準を満たす者を対象とした。また、同年代の乳がん未経験の女性(未経験者)、男性(未経験配偶者)にも調査を行った。

調査項目は、乳がんに関する項目、SOC スケール 29 項目版(Antonovsky, 1987 山崎・吉井訳 2001)(以下 SOC-29)であった。

分析には HAD17.20(清水, 2016)を用いた。なお、本研究で使用したデータは雲財(印刷中)と一部重複している。

【倫理的配慮】

本調査は、「神戸大学大学院人間発達環境学研究科における人を直接の対象とする研究審査」の承認(2020年4月承認: 受付番号 433)を受けて実施された。

【結果】

SOC-29 は、全項目で SOC 一因子が想定されているが、把握可能感、処理可能感、有意味感の3つの下位因子も想定されており、妥当性が検証されている(戸ヶ里・山崎, 2005)。

そこで、本研究では SOC に加えて各下位因子でも検討を行った。

SOC、把握可能感、処理可能感、有意味感それぞれが乳がん経験の有無による差があるか検討を行うために、経験者と未経験者、経験配偶者と未経験配偶者それぞれにおいて t 検定を行った。その結果、経験者と未経験者の間には、SOC、把握可能感、処理可能感、有意味感いずれにおいても有意差が確認されなかった($t = 0.89 \sim 1.19$, いずれも n.s.)。一方、経験配偶者と未経験配偶者の間には、処理可能感、有意味感、SOC において、有意差が確認され(処理可能感: $t = 3.11(p < .01)$ 、有意味感: $t = 2.33(p < .05)$ 、SOC: $t = 2.59(p < .05)$)、乳がん経験有の方が各得点が低かった。

【考察】

乳がん経験によって SOC およびその下位因子の得点が減少することが本研究では示唆された。SOC の形成には人生経験の特徴づけが関与しているとされ、人生に影響を及ぼすような出来事を経験した際には変化することが理論上指摘されており(Antonovsky, 1987 山崎・吉井訳 2001; Sagy & Antonovsky, 2000)、本研究の結果はこのことを支持するものであったと言える。ただし、経験者において差が見られなかった点については、検討の余地があると思われる。なぜなら、本研究は、乳がんを経験したかどうかだけの観点からのみで検討を行っており、より多様な観点から検討を行う必要があると考えられるからである。例えば、乳がんの罹患時期や病期などの乳がん罹患当時の状況、罹患当時および現在の社会経済的地位などを含めて検討することで、乳がん経験が健康の保持増進に寄与する SOC との関連をより明確にすることが可能になるだろう。

Proactive Coping Scale of Health Behavior の開発

○永峰大輝(桜美林大学大学院国際学研究科)

武田清香(東海大学医学部看護学科, 桜美林大学大学院国際学研究科)
・石川智(桜美林大学大学院国際学研究科)・石川利江(桜美林大学大学院)

キーワード: Proactive Coping, 健康行動, 尺度開発, 信頼性, 妥当性

【目的】 Proactive Coping は将来起こりそうなストレスを察知した時に、対処のチャンスと捉えて挑戦的に行う対処行動である。健康に関する自己管理に影響があるとされており、生活習慣病患者の支援を試みた研究が行われている(Thoolen et al., 2009)。測定尺度は、Proactive Coping Inventory (Greenglass et al., 1999) が最も使われているが、多様な状況で評価が可能な内容で構成されており、産業や教育といった必ずしも健康状況に起因しないものも含まれた包括的な概念として測定される項目内容になっている。したがって、本研究では健康行動に特化した Proactive Coping の信念を測定することが可能な尺度を開発し、因子構造及び信頼性と妥当性の検討を行う。

【方法】 2021年7—8月に実施した。大学生、大学院生、関東在住の一般成人計319名(男性113名、女性199名、回答なし7名、 $M_{age} = 30.80$, $SD = 13.86$)を分析対象とした。質問内容は以下のとおりである。

1. Proactive Coping Scale of Health behavior (PCHB) 先行研究を参考に、研究者の一人が14項目の原案を作成し、他の研究者2人の意見を参考に表現の確認と修正を行った。その後、大学生54名に予備調査を実施し、表現の修正を行った。
2. 日本語版 Proactive Coping Inventory (PCI: Greenglass et al., 1999)
3. 主観的幸福感尺度 (SHS: 島井他, 2004)
4. 運動自己効力感尺度 (尼崎他, 2013)
5. 健康習慣に関する項目 (高橋他, 2008)

【倫理的配慮】 桜美林大学の研究活動倫理委員会の承認を得たうえで実施された。

【結果】 探索的因子分析(最尤法, Promax

回転)を行い、尺度の因子構造を検討した。その結果3因子解が得られたが、参考にしたPCIが1因子であることや、因子の解釈可能性から1因子構造が妥当であると判断し、抽出する因子数を1に指定して再度分析を行った。さらに因子負荷が.40以下の2項目を除いた残りの12項目で、再び因子数を1に指定して分析を行った。確認的因子分析の結果、モデル適合度は $\chi^2(53) = 164.33$, $p < .001$, TLI = 94, CFI = .95, RMSEA = .08, SRMR = .04であり、十分な適合度が得られた。信頼性係数は α , $\omega = .94$ であり十分な信頼性が確認された。各尺度との関連について、PCHBとPCI ($r = .48$), SHS ($r = .24$), 運動自己効力感尺度 ($r = .68$) いずれも有意な正の相関が見られた。健康習慣に関する項目との関連は、禁煙以外の項目で健康習慣をしている人は、していない人よりも有意にPCHBが高かった($ps < .05$)。

【考察】 探索的および確認的因子分析の結果から、PCHBが1因子構造であることが確認された。また、十分な信頼性および妥当性を備えていることが示された。Proactive Copingは2型糖尿病やCOPDをはじめとした生活習慣病の自己管理にも強く関わっており、介入研究が徐々に増えてきている。近年、健康な人に対する1次予防的なProactive Copingの適用だけでなく、疾患を抱えている人に対する2次予防、3次予防的な適用ができることが明らかになってきた。今後は、生活習慣病患者を対象に調査を行うことで、臨床的な妥当性も検討していく必要がある。さらに、Proactive Copingと生活習慣病の関連について詳細に調べるために、青年期や成人前期から長期的に縦断調査を行うことが今後の課題となる。

福祉従事者用コンパッション実践尺度の開発

○石川智 (桜美林大学大学院国際学研究科)

永峰大輝 (桜美林大学大学院国際学研究科)
松田チャップマン与理子 (桜美林大学健康福祉学群)

キーワード：コンパッション，福祉従事者，実践，尺度開発

【目的】被援助者が抱えている苦痛の低減や困難な課題の解決は福祉従事者にとって業務遂行の中核をなしている。人が抱えている苦痛などを取り除くことはコンパッションと呼ばれ、近年の心理学領域で注目が集まっている。本研究では、福祉従事者が被援助者に対して向けるコンパッションを測定する尺度 (The Compassion Practice Scale for Welfare Professionals : CPWP) を開発し、信頼性及び妥当性の検討を行う。

【方法】インターネット調査会社に調査を依頼し web 調査を実施した。本研究は、予備調査を含め 3 回の調査を実施している。

調査①予備調査 CPWP の作成にあたり、コンパッションや対人支援職の実践に関する先行研究を参考にしながら、心理学や社会福祉学を専門とする研究者や社会福祉現場で勤務している社会福祉士と協議の上、75 項目の質問項目を作成した。分析対象者は高齢者、障害者、児童福祉領域で勤務しており、被援助者への直接的な対人支援を主業務としている計 283 名 (男性 156 名, 女性 127 名, 平均年齢 47.93 歳, $SD = 9.28$) であった。

調査②本調査 1 予備調査とは異なるサンプルに調査を実施し、計 393 名 (男性 170 名, 女性 223 名, 平均年齢 46.94 歳, $SD = 10.59$) を分析対象とした。質問内容は以下の通りである。

1. 福祉従事者用コンパッション実践尺度
2. ワーク・エンゲイジメント尺度 : WE (Shimazu et al., 2008)
3. 多次元共感性尺度 : OOER (鈴木・木野, 2008)
4. 日本語版コンパッションエンゲイジメント・アクション尺度 : CO (Asano et al., 2020)

5. 日本語版セルフ・コンパッション尺度 : SC (有光, 2014)

調査③本調査 2 本調査 1 回目が実施されてから 3 週間の期間を空け、本調査 1 回目に参加した対象者のうち、調査会社によって無作為に抽出されたサンプル計 100 名を分析対象とした。

【倫理的配慮】本研究発表に際し、必要な倫理的配慮を満たしている。

【結果】予備調査及び本調査 1 回目において、項目分析を実施し、最終的に 48 項目が残った。その後、探索的因子分析 (最尤法, Promax 回転) を行い、因子負荷量が .40 以下の項目は除外した。その結果、5 因子 16 項目が得られた。また、信頼性係数は、 $\alpha = .96$ と十分な値が得られた。確認的因子分析の結果、高次因子モデルの適合度が、 $\chi^2(99) = 367.89$, $p < .001$, TLI = .94, CFI = .95, RMSEA = .08, SRMR = .04 となり、他の因子モデルと比較して良好な適合度が得られた。CPWP は、WE ($r = .43$), OOER ($r = .53$), CO ($r = .77$), SC ($r = .21$) といずれも有意な関連が見られた。本調査 2 回目では、CPWP の信頼性を再検査法によって検討するため、Person の相関係数を算出したところ、中程度の関連 ($r = .66$) が見られた。

【考察】本研究の結果から、CPWP は高次一因子モデルが採択され、十分な信頼性や妥当性を有していることが確認された。コンパッションは、福祉従事者が対人支援するうえでも重要な要素であり、福祉従事者の被援助者に対するコンパッションが測定できる尺度が開発されたことには意義があると言える。今後は、CPWP の有効性を明らかにすることや、CPWP を高めることができる介入プログラムの開発など実証的な研究が必要である。

ポジティブ・フィードバック受容尺度作成

—内的作業モデルがポジティブ・フィードバック受容を介し well-being に及ぼす影響—

○大西 悠斗 (東京成徳大学大学院心理学研究科)

石村 郁夫 (東京成徳大学応用心理学部)

キーワード: ポジティブ・フィードバック, アンビバレント, well-being, ポジティブ反応, 尺度作成

【目的】

近年,ポジティブなフィードバックを受容しにくい人々の存在が指摘されている。“自分は肯定的な評価に見合う人間ではない”(平野,2019)、“公の場でポジティブな評価をされると恐怖を感じる”(前田・関口・堀内・Justin W・坂野,2015),更に“臨床領域においては,ポジティブな体験の価値を下げ,あるがままに受け入れられない”(Gilbert, MeEwan, Catarino, Baião, & Palmeira, 2013) といったことが先行研究より報告されている。

以上を踏まえ,本研究ではポジティブ・フィードバックを「他者から自身の良いところ,強み,長所などに対して,ほめられたり,評価されたり,認められたりされること」と定義し,「ポジティブ・フィードバック受容尺度」の作成を行う。また,ポジティブ・フィードバックの受容を介して,心理状態にどのような影響を及ぼすのか検討することで,介入効果の向上や臨床現場での活用の一助となることを目的とする。

【方法】

調査対象者 大学生 312 名(男性 104 名,女性 201 名,その他 6 名,未回答 1 名:平均年齢 20.43 ± 1.98 歳)を調査対象者とした。

調査時期・手続き 2021 年 11 月 16 日から 2021 年 11 月 30 日にかけて実施した。

調査内容 調査対象者の基本属性に加えて,①ポジティブ・フィードバック受容尺度②自己受容尺度の下位因子である望ましい自己の受容因子③内的作業モデル尺度④well-being 尺度で構成された。

【倫理的配慮】

本研究発表に際し,必要な倫理的配慮を満たしている。

【結果】

ポジティブ・フィードバック受容尺度にお

けるポジティブな反応を測定する 12 項目に対し,最尤法による探索的因子分析を行ったところ,3 因子構造が確認された。1 因子目を「わかってもらえてうれしい」,2 因子目を「より強みに気付く」,3 因子目を「自信や意欲を獲得する」と命名した。信頼性は,全ての因子において $\alpha = .70$ 以上であった。次にネガティブな反応を測定する 41 項目に対し,上記と同様の分析を行ったところ,6 因子構造が確認された。1 因子目を「期待に応え続けようとする」,2 因子目を「裏の意図を読み取る」,3 因子目を「深く関わらないようにする」,4 因子目を「たいしたことではないと捉える」,5 因子目を「ポイントがずれていると感じる」,6 因子目を「どうせだれもわからないと感じる」と命名した。全ての因子において $\alpha = .80$ 以上であった。妥当性は,望ましい自己の受容因子(ポジティブな反応 $rs = .495-.596, ps < .01$, ネガティブな反応 $rs = -.630--.36, ps < .01$)との有意な相関が見られた。

【考察】

性差の検討の為,多母集団分析を行った所,男性の安定型においては,ポジティブ・フィードバックが有効であるのに対し,回避型・アンビバレント型では,ポジティブ・フィードバックが有効ではないということが明らかになった。回避型・アンビバレント型に対してはポジティブ・フィードバックを行うにあたり,環境や伝え方などを工夫していく必要があると考える。また女性では,安定型に加えてアンビバレント型においても,ポジティブ・フィードバックが有効であるのに対し,回避型ではポジティブ・フィードバックが有効ではないということが明らかになった。女性のアンビバレント型には,ポジティブ・フィードバックを行いつつ,ポジティブな反応へと変容を促すことが可能になると考える。

コロナ禍での基礎看護技術演習の評価

-科目終了後アンケートの分析-

○佐居 由美(聖路加国際大学看護学研究科)

キーワード：看護基礎教育 看護ケア 看護技術演習 コロナ禍 アンケート

【目的】2020年からのCOVID 19流行により、看護基礎教育においても遠隔学習等を余儀なくされた。A大学看護学部でも、2020年度前期は在宅学習となり、患者に看護ケアを実施する手段である看護技術習得科目も、視聴覚教材を主とする学習方法にて行った。翌年、2021年度は、徹底した感染対策のもと学内演習が可能となった。本稿では、2021年前期のコロナ禍に感染対策を講じて行った、看護技術習得を目的とした科目を評価するために、科目終了時にアンケートを行ったため、その分析結果を報告する。**【方法】****〔演習内容〕**2021年度の学内演習は、コロナ前と同内容の演習項目(全身清拭、陰部洗浄、車椅子移動、病床環境の整備、口腔ケア/食事介助等)にて実施した。演習は、学生個人が看護技術の手順用紙を作成後、グループワークにて「手順用紙の内容確認」を行い、その後、看護技術の自己練習を経て、習得状況を確認するための「個人演習」を実施するといった段階を踏んで学習する方法をとった。**〔感染対策〕**密を避けるため1回の演習人数を減らし換気を徹底した。人を相手とする演習はフェイスシールド着用とし、発熱や濃厚接触によるすべての欠席に代替演習日を設けた。本科目を評価するために、科目終了時に、授業支援クラウドにて、WEBアンケートを実施した。アンケートでは、「学習目標を達成するために、学内演習は役に立ったか」「段階的に演習を行う方法は、役に立ったか」について、「非常に役に立った」から「役に立たなかった」の5段階にて回答を求めた。また、その理由についての自由記述欄を設けた。

【倫理的配慮】本研究発表に際し、必要な倫理的配慮を満たしている(本科目が終了した4か月後の学生への成績告知が終了した時期に、アンケート結果を看護教育研究のために活用する旨、授業支援クラウドにて告知した。

告知内容は、「活用においては、アンケート結果を集計し匿名化して公表すること」、「協力への拒否やアンケート結果使用への不同意等を受け付けること。受付期間：1か月」であった。受付期間中に、協力拒否や不同意の申告はなかった)。**【結果】**演習が学習目標達成にどのくらい役だったかについては、86%が「非常に役立った」と回答した。段階を踏んで行う方法については、「非常に役だった」と72%が回答した。回答率は95%(95名)であった。段階を踏んで行う演習方法に関する自由記述の概要を把握するため、自由記述3992文字の搬出語を、質的研究支援ソフトNVivoを用い、頻出語クリエにて可視化した結果、「知識」が一番頻出した単語であり、164カウントであった。そのため、「知識」を含む記述内容を確認したところ、「みんなでより良い方法などを考えることで、より知識が身に付いた」「グループワークで手順を確認したあと、個人で練習するという流れは、技術や知識が定着しやすかった」といった記述がみられた。演習期間の感染者は0人であった。**【考察】**コロナ禍にて感染対策を講じ、コロナ前と同じ演習方法にて、看護技術習得のための学内演習を行った。科目後アンケートの結果、演習が科目の「学習目標達成に役に立った」という回答が約9割であり、感染対策下での演習が学習目標達成に支障を来していないことが確認された。また、段階を踏んで学習する演習方法については、「技術や知識が定着しやすかった」という記述が多くみられ、学生が自ら作成した手順を、グループワークでさらに考え、その方法で看護技術を練習する、という段階を踏んで学習する方法の有効性が示唆された。今後も感染対策を講じつつ、よりよい演習方法を検討していきたいと考える。

催眠についてのイメージと催眠態度の対応関係の性差 その1

—催眠の使用場面や目的についての自由記述のテキスト・マイニングから—

○中谷智美(甲南大学大学院人文科学研究科)

福井義一(甲南大学文学部)・今井田貴裕(人間環境大学心理学部)・磯和壮太郎(名古屋芸術大学教育学部)・堀 孝司(甲南大学大学院人文科学研究科)・大浦真一(東海学院大学人間関係学部)

キーワード：催眠についてのイメージ、催眠態度、テキスト・マイニング、性差

【目的】

催眠は心身の疾患に有効であるが、一般的にそのイメージは悪い。この事態を打開するため、催眠についてのイメージの正確な把握が必要である。そこで、中谷他(2022a)は、催眠の使用場面や目的についての自由記述データのテキスト・マイニングから、「記憶の想起」など8つの共起ネットワークを抽出し、催眠態度との対応分析からは、肯定的催眠態度と治療的目的、否定的催眠態度と反社会的目的の対応をそれぞれ報告した。しかし、尺度で測定された催眠についてのイメージと催眠態度の関連には性差がある(中谷他, 2021)にもかかわらず、中谷他(2022a)では性別が考慮されていなかった。そこで本研究では、中谷他(2022a)のデータを再分析し、性別と催眠態度の組み合わせにより協力者を群分けして、催眠の使用場面や目的についての自由記述との対応関係を検討した。

【方法】

協力者：中谷他(2022a)と同一の大学生176名(女性126名、男性50名)のデータを用いた。データには、中谷他(2022b, c)や福井他(2022a, b)と一部重複がある。

尺度構成：催眠の使用場面や目的を、「催眠は、どんな場面、どんな目的で使用されると思いますか。思った通りのことをできるだけたくさん述べてください」という質問に対する自由記述で回答してもらった。催眠態度尺度(清水, 2009)で、催眠態度得点を得た。得点が高いほど、催眠に対して肯定的であることを示す。質問票には、本研究で使用されなかった尺度も含まれていた。

【倫理的配慮】

本研究発表に際し、必要な倫理的配慮を満たしている。調査は、第2~4著者の担当する講義の一環として、匿名で実施された。デ

ータの利用目的と取り扱い・同意の有無による不利益の非生起性等について同意が得られた者のデータのみを使用した。

【結果】

性別と催眠態度(否定、中立、肯定)の組み合わせによる6群と、KH Coder(樋口, 2004)により抽出された語句との対応分析の結果、催眠態度が否定的な男性では、何かを強制するための使用や宗教への言及が特徴的であることが分かった(Figure 1)。

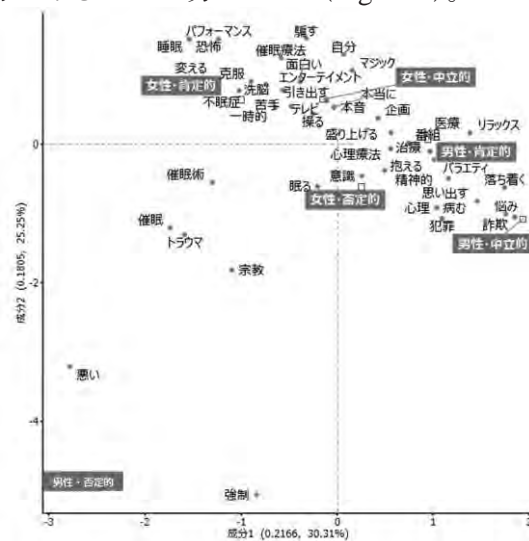


Figure 1 性別と催眠態度による対応分析結果
【考察】

本研究から、催眠についてのイメージと催眠態度の関係において、量的側面だけでなく質的側面においても一部性差が認められた。しかし、他の群ではサンプルサイズが十分であった($N \leq 20$)のに対して、催眠に否定的な男性のそれは小さかった($N=7$)ため、知見の過度の一般化は避けねばならない。今後、十分なデータ数を確保し、結果の再現性を検討する必要がある。また、催眠イメージの他の側面と催眠態度の関係についても、性差を考慮して検討する必要があるだろう。

催眠についてのイメージと催眠態度の対応関係の性差 その2

—催眠状態期待の自由記述のテキスト・マイニングから—

○福井義一(甲南大学文学部)

中谷智美・堀 孝司(甲南大学大学院人文科学研究科)・今井田貴裕(人間環境大学心理学部)・
磯和壮太郎(名古屋芸術大学教育学部)・大浦真一(東海学院大学人間関係学部)

キーワード：催眠についてのイメージ、催眠態度、催眠状態期待、テキスト・マイニング、性差

【目的】

催眠は、心身のケアに有効であるにもかかわらず、わが国ではその活用が進んでいない。その一因に、一般に催眠についての否定的なイメージが蔓延していることが挙げられる。福井他(2022)は、催眠状態期待(人は催眠に入るとどうなるか)についての自由記述データのテキスト・マイニングを行い、共起ネットワーク分析により、認知機能の変化や被動感など11のネットワークを抽出したのに加えて、対応分析により、催眠態度が肯定的な場合は潜在能力が解放されるというイメージと、否定的な場合は機能が低下するというイメージと、それぞれ対応することを報告した。しかし、量的研究では、性別により催眠状態期待と催眠態度の関係が異なる(中谷他, 2021)にもかかわらず、福井他(2022)では性別の要因を考慮していなかった。

そこで本研究では、福井他(2022)のデータを再分析し、性別と催眠態度の組み合わせで協力者を群分けして、催眠状態期待についての自由記述との対応関係を検討した。

【方法】

協力者：有効回答が得られた大学生178名(女性127名、男性51名)のデータを分析対象とした。平均年齢は19.48歳($SD = 0.97$)であった。データセットは、福井他(2022)と同一である。データには、中谷他(2022a-d)と一部重複があった。

尺度構成：催眠状態期待を、「催眠にかかると、人はどのようになると思いますか」という質問への自由記述で回答してもらった。催眠態度尺度(清水, 2009)で、催眠態度得点を得た。得点が高いほど、催眠に対して肯定的であることを示す。質問票には、本研究で使用されなかった尺度も含まれていた。

【倫理的配慮】

本研究発表に際し、必要な倫理的配慮を満たしている。調査は、第1, 4, 5著者の担当する講義の一環として匿名で実施された。データの利用目的と取り扱い・保管方法、同意の有無による不利益の非生起性等について同意が得られた者のデータのみを使用した。

【結果】

性別と催眠態度(肯定、中立、否定)の組み合わせによる6群と、KH Coder(樋口, 2004)により抽出された語句の対応分析の結果、男性で催眠態度が否定的・中立的な群で特徴的な記述が目立った。前者では、機能低下や思い通りに行動できないことと、後者では、「思い込みが強くなる」、「本音が出てしまう」といった語句と対応することが分かった。結果をFigure 1に示した。

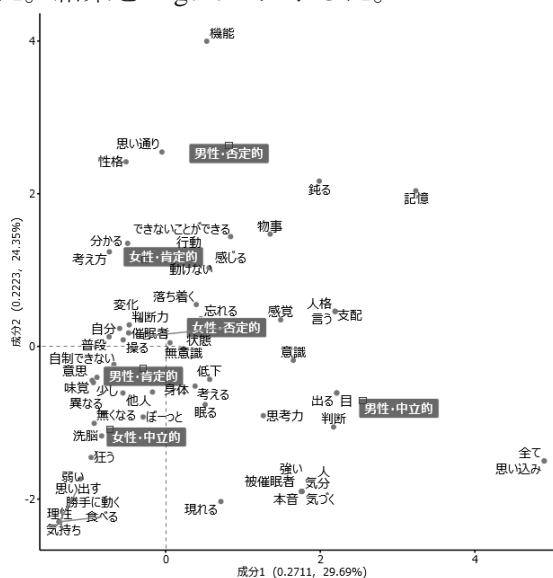


Figure 1 性別と催眠態度による対応分析結果

【考察】

本研究から、特に男性において催眠態度が否定的である背景に、「催眠状態に入ると意図に反して機能や行動が制限される」というイメージが影響していることが示唆された。

「甘え」とフォーカシング的態度との関連

○和田紅波(株式会社ジェイクエスト)

小泉隆平(近畿大学)

キーワード: 「甘え」, フォーカシング的態度

【目的】

土居(2001)は「甘え」には健康で素直な「甘え」と屈折した「甘え」があるとし、後者の「甘え」の増加により精神科医やカウンセラーに訪ねる者が多くなっているということから、前者の「甘え」を持つことの重要性が窺える。また玉瀬・今村(2006)は、屈折した「甘え」は不健康な人に見られる心理的傾向であると示唆している。そのため、健康で素直な「甘え」を持つことは、精神的健康の維持や増進に重要であると考えられる。

そこで本研究では、精神的健康と関連の深いフォーカシング的態度(Gendlin, 1978 村山他訳 1982)との関連を検討する。フォーカシング的態度は精神的健康や自己理解に寄与することが知られている(上西, 2019; 福盛・森川, 2003; 酒井・河崎・池見, 2017)。しかし、これまで精神的健康との関連が高い「甘え」との関連は検討されていない。よって、本研究では、「甘え」の健康的側面とフォーカシング的態度との関連を検討する。

【方法】

大学生 162 名(男性 51 名, 女性 109 名, どちらでもない 2 名)を分析対象とした。平均年齢は 20.83 歳($SD=1.34$)であった。質問紙は、①フェイスシート②多元的甘え尺度(玉瀬・相原, 2005), ③フォーカシング的態度尺度(森川・永野・福盛・平井, 2014)を使用した。

【倫理的配慮】

近畿大学総合社会学部研究倫理委員会が定める規定に沿って研究を行った。

【結果】

相関分析の結果、「甘え受容」は「注意」($r=.26, p<.01$)との間に弱い正の相関、「甘え歪曲」は「受容」($r=-.26, p<.01$)との間に弱い負の相関、「屈折した甘え」は「受容」

($r=-.22, p<.01$)との間に弱い負の相関が見られた。

【考察】

「甘え受容」と「注意」に弱い正の相関がある($r=.26, p<.01$)ということから、他者の「甘え」を受け入れられる者は自己の内面に注意を払える傾向があると考えられる。つまり、この結果は、カウンセラーがクライアントの語りを傾聴することが、自己の内的過程に注意を払うフォーカシング的態度を高めるあり方(小泉, 2017)を裏付けるものである。また、他者の「甘え」を受け入れ、自己の内面に注意が払えるということは自己への信頼を基盤としている。さらに、「注意」が「甘え受容」と弱い正の相関($r=.26, p<.01$)があることは、健康で素直な「甘え」があるがゆえに自己の内面への注意ができることを示唆している。また、「甘え歪曲」とフォーカシング的態度における「受容」との弱い負の相関関係($r=-.26, p<.01$)の結果から、他者に自己の「甘え」を受容されないためふてくされたり、腹を立てたりする屈折した「甘え」を持つ人は、自己の内面を受容できない、つまり自己に対する健康で素直な「甘え」が低い傾向にあると推察できる。このことは、精神内界にある甘える対象にうまく甘えることができない傾向がある状態にある土居(2001)の「落ち着きのない人」のカテゴリーに相当すると考えられる。続けて、「受容」と「屈折した甘え」との間の弱い負の相関($r=-.22, p<.01$)は、他者に対する健康で素直な「甘え」を発揮できず、同時に自己に対する健康で素直な「甘え」も上手く発揮できないでいると考えられる。以上のことから、本研究では「甘え」の健康的側面とフォーカシング的態度との間に関連があることが示唆された。

